

私を育てた  
あの時代、あの出会い

第6回

# 先輩の板書をまねたことが 教師としての出発点となった

佐賀県 佐賀市立循誘じゆんいん小学校校長 橋本圭一郎 HASHIMOTO KEIICHIRO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、橋本校長が語る。

## 教育実習で指導教諭の 板書に衝撃を受けた

初任校は落ち着いた雰囲気の良い学校で、先輩の先生方にも恵まれていました。しかし、新米の私は何かと壁にぶち当たっていました。経験の乏しい自分出来ることは限られている。どのように答えを出せば良いのかも分からない。そこで、私は尊敬する先輩の指導を100%まねることから始めました。ただ、全て完璧な教師などいませんから、教科指導ならこの先生、生徒指導は、部活動は……と、分野ごとに手本とする先生

生を見付けていったのです。

教科指導における師は、教育実習時の指導教諭だった山崎滋夫先生でした。山崎先生は、今でこそ一般的ですが、1時間の授業を黒板1枚分に全て収まるように板書されていました。先生が話され、黒板に書かれていく内容は、次第に線や矢印で結ばれ、授業の終わりにはそれらが見事に構造的に示されていました。板書がそのまま、生徒一人でもしっかりと復習できるノートになるのです。板書といえは端からずつと書いていき、いっぱいになったら消して、また書き始めるという板書を見てき



はしもと・けいいちろう 専門教科は社会科。佐賀県公立中学校教諭、佐賀県教育庁学校教育課指導主事などを経て、2009年度から2年間、佐賀市立小中一貫校北山校の校長を務める。11年度、佐賀市立循誘小学校に赴任。

### 教育実習

長崎大教育学部  
附属中学校で受けた  
教育実習で、  
指導教諭だった  
山崎滋夫先生に  
大きな影響を受ける



大学の  
卒業アルバムの一コマ。  
右から2人目  
(立っている人)が  
橋本校長

### 1978 (昭和53)

新採で伊万里市立  
大川中学校に赴任

### 2006 (平成18)

唐津市立切木(きりご)  
中学校に校長として赴任

### 2009 (平成21)

佐賀市立小中一貫校  
北山校に2代目校長  
として赴任。  
校舎一体型の  
小中一貫教育を推進

### 2011 (平成23)

佐賀市立循誘小学校に  
赴任

た私にとって、山崎先生の板書は衝撃的でした。私はそれを新採時からまねさせてもらいました。以来、4月の最初の授業で子どもにノートを横にして板書を写すように伝えていきます。子どもからは「なぜ？」と疑問の声が挙がりますが、次第に余白に私の話をメモしたり、自分で調べたことを書き込んだりして、自分なりにノートの取り方を工夫するようになってくれました。板書は私の授業づくりの軸となり、どんなに忙しくても、板書計画だけはしっかり作り授業に臨むようにしていました。

先日、自宅の書斎から教育実習時の指導案が出てきました。私のつたない手書きの文字の横にある山崎先生の赤ペン。「ここは良いけれど、こっちはこうするともっと良くなる」というように、褒めつつも改善すべき箇所を指摘してくださっていました。丁寧な指導に感謝すると共に、山崎先生の指導が私の教師としての原点であることを改めて感じました。

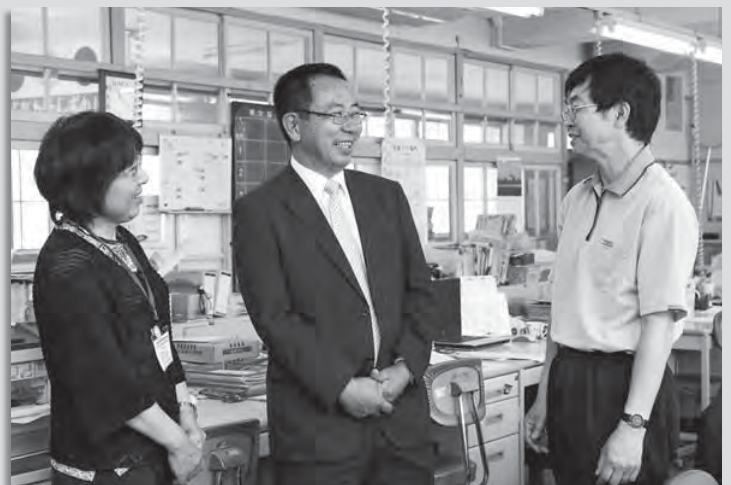
「まね」というと聞こえが悪いかもしれませんが、若手のうちはすごいと思った指導をどんどん取り入れて試すことでしか経験を蓄積できない

と思います。うまくいかない時は、子どもの反応を見て、自分なりに工夫を加えて再び試す。それを積み重ねることで、最初は100%先輩のまねだったことが、自分の指導に変わっていくのだと思います。

### 地域からのまなざしが 子どもの目を地域へと向ける

良いと思う取り組みをまねる精神は、今の私の学校経営でも生きています。元々、中学校の社会科教諭の私が小学校と縁を持つようになったのは、5年前に唐津市立切木中学校に赴任してからです。校長として小学校や地域との機会に出席し交流を深める中で多くのことを学びました。その一つは、学校と教師が自ら「外に向かって開くこと」の大切さです。切木では保護者や地域の方々が全面的に小学校の先生方を信頼し、その延長上にある中学校に対しても自然と信頼を寄せてくださっていました。今考えると、切木小学校が学校の様子を外部にきちんと発信し、また、人と人との交流を深めて、厚い信頼関係を築いておられたのです。そのため、中学校に対しても保護者や地域の信頼が生まれると

## 「外に向かって自らを開く その姿勢が信頼関係を築く」



いう、落ち着いた教育環境があったのです。

内に閉じこもらず、外と積極的に交流することで信頼関係を築く。この思いは、前任の小中一貫校や本校の校長を務めるうちにますます強くなりました。本校には15年以上、毎朝通学路に立ち、子どもたちにあいさつをしてくださる地域の方々がおられます。私も歴代の校長から引き継いで毎朝校門に立ち、本校の児童だけでなく、前を通る中高生や地域

の人々とあいさつを交わしています。小さなことですが、地域からの温かなまなざしを受けて育った子どもは、成長したら自分が地域にそのまなざしを向けるようになる。こうした好循環は小学校の頃からの積み重ねで出来るものであり、長年続けてくださった地域の人々に培われた文化です。これからも良いことはまねながら、ふるさとに愛着を持ち、地元で活躍するよう子どもたちを育んでいきたいと思えます。